

<p>考え方について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・西東京市全体の児童・生徒各学校入学数のバランスを考えて、100年先を見据えた適正規模・適正配置の指針となることが重要と考える。 ・「適正」とはという点は様々な視点があり、とても難しいと感じた。保護者という立場から児童・生徒の心身の健やかな成長という点に重きを置いた適正ということを考えていければと思う。 ・短期的なスパンで平均的な児童生徒数の学校作りを目指すのか、長期的スパンで学校の統合、学校施設の複合化、小中連携教育等の問題へ取り組むかも変わってくる。 ・何をもち「適正とする」かを考える必要がある。市内小学校、中学校を見ても生活に格差が見られる。生活に困窮する地域には子供に関係する課題も多く、その要因が保護者の生活実態や精神的な課題によるところが多い。したがって一律に規模や人数によって学校間を比べることはできない。大切なことは市内各校区の生活環境や特質を考慮した上で適正に配置することが望ましい。 ・泉小が閉校したので、閉校による教職員、子どもたちに関する具体的な事例が本市にはある。
<p>規模について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮を要する児童や特別な支援を要する子どもが集まっている学校もあり、その辺も考えて決めていかなければならないと思う。 ・近接している場合は、小中一貫にしたらどうかという話もあり、そういうことも可能性として含まれるのではないか。 ・生徒数が多い学校は多い学校の特色がある。いろいろな部活があり、切磋琢磨できる。小さい学校は部活では目立たないが、小規模校だからできることがあると感じた。 ・人数が多く切磋琢磨できても一人当たりの空間が小さくなってしまふのは保護者としてどうかと思う。それぞれの学校の校舎の規模に合わせた人数というのがどれくらいかを知りたい。その中で、特別な事情がある子どもが多い学校は人数を少なくするなど調整するのも一つの案ではないか。 ・生徒数が多い学校は多い学校の特色がある。いろいろな部活があり、切磋琢磨できる。小さい学校は部活では目立たないが、小規模校だからできることがあると感じた。人数が多く切磋琢磨できても一人当たりの空間が小さくなってしまふのは保護者としてどうかと思う。その中で、特別な事情がある子どもが多い学校は人数を少なくするなど調整するのも一つの案ではないか。 ・個人的には中学校は、400人前後の規模が良いと感じている。敷地面積もあるが、教室数という観点から学級数が増えると数学と英語の少人数展開の指導の影響がある。普段は40人近い人数で切磋琢磨し、少人数展開で学力向上を目指す、良いバランスでできていると思う。 ・大規模校は、教員の目が届きにくく、スペースの課題やトラブルがある一方、部活が盛んで、選べる。ただ、部活のメンバーが多いとレギュラーになれないが、小さい学校だとなれたりするので、それぞれに良さがある。床面積や人数の一覧表で単純に見比べて子どもがどのくらいのスペースを使えるかというのはイメージできると思う。 ・人数を見ると300人から900人の開きがあり、地域によっては、距離的には近い学校が隣の学区域であったり、いろいろな条件があると思う。障害のある方や配慮を要する児童もいるが、それも含めて、いろいろな条件を出して、その中で判断していくということも必要かと思う。 ・通学距離や安全性も分かりやすいので(大きな道路など)学校の適正規模を一言でまとめるのは難しいが中学校なら1学年3—5学級で全教科の教員が揃うと公務や部活動担当も含めてちょうど良いのでは。

<p>教育活動と体制について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校をコミュニティにすればいろいろな人が外部指導員として入り、新しい考え方もできる。 ・地域コミュニティの視点はいくまで補完的な考え方であり、少人数の授業ができたり、英語教育が充実していたりという教育環境を整えることが最も重要であると考えている。 ・今までの流れだと、最大限まで大規模校で粘るという方向性だが、子どもにとって最善の考え方なのか疑問である。将来的に人口減少になるため、今の子どもが我慢をしなくてはいけないという捉え方もできる。急な転入等により41人学級になった小学校の例もあり、教員の配置や支援員等の配置の整備を進めていくことも今の子どもにとっては必要なことなのではないか。 ・大規模校と小規模校の学校間で教育の格差がある。大規模校では少人数授業ができなくなりTTによる対応を余儀なくされているところもある。西東京市の考える適切な教育サービスの範囲内で学級数・児童生徒数を考えていくべきである。
<p>施設について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一人当たりの校舎延床面積が狭いため、生徒一人あたりのスペースが十分に確保できていないように感じる。 ・近年に建設した中原小学校、けやき小学校、青嵐中学校は校舎の造りが他の学校と違うため、単純な延床面積での比較検討は難しい。 ・学校の造りや空気感もあるので一概に比較検討ができるものではないが、田無第一中学校や保谷中学校は、いつもあわただしい空気感といったイメージがある。一方、柳沢中学校は静かな空間に身をおける環境が整っていると考える。 ・適切なパーソナルスペースというところも、教室数がこれだけ足りないということを現場でアピールするチャンスではないかと思う。
<p>通学区域について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひばりが丘中学校と田無第二中学校の通学区域の問題では、通学の安全性の問題、通学の距離、小学校から中学校のつながり・進学先の問題等、様々な問題を考慮にいれながら検討を行った経緯がある。特に通学の安全性については、最も重要な要素であると考えている。 ・新規開通の道路は構想から開通まで年月がかかるのが現状であるが、安全性の問題は視点に入れるべきと考える。 ・子どもが実際に通う安全な学区というものがあると思う。どんなに近くても大通りを渡らなくてはならない、踏切を越えなくてはならないという点のコメントもできる。
<p>学校選択等の制度について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひばりが丘中の移転に伴い、学校選択の話が出た中で、部活が学校選びの基準になると感じた。 ・学校選択制度をできる限り存続することで、部活動や勉学を理由とした個々人の特性に応じた希望を尊重できると思う。

<p>地域とのつながり等について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの居場所の充実として、各学校の施設開放運営協議会を作り事業を行っている。公民館に近い小中学校は公民館に依存しがちで、公民館でも同じような事業を行っている。 ・西東京市において地域でまとまっていこうという考え方があるのであれば、その視点も取り入れたほうがよいのではないか。 ・ひばりが丘中学校と田無第二中学校の通学区域の見直し時は住吉小学校からひばりが丘中学校の進学先の流れが分断されるため、民生委員や児童委員、育成会の従来の考え方にも影響がでてくることが懸念された。 ・PTAの担う役割を拡大することは現状厳しいため、地域の力に頼るしかない。 ・地域に子どもたちを育ててもらっただけでなく、学校側も地域に貢献していくことが重要である。 ・放課後など、子どもがどこにいれば安全・安心かという視点がある。学校にいるのが一番安全・安心という考え方もある。 ・中学生は自立の年齢ということもあり、部活と塾の時間が大部分を占める。そこに入り込めない中学生に地域コミュニティの場を提供し、見守っていくというスタンスがよいのではないか。
<p>財政的な視点について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・20年、40年後の推移からは西東京市の大部分で年少人口比率が10%を下回ることがわかる。将来的な人口予測やコスト面を踏まえながら、長期的な目線に立ち、学校施設の統廃合を検討していく必要があると考える。 ・行政側は子どもを中心とした枠組を考えなくてはいけない。教育の水準を維持・向上するには予算がかかるものという認識を持たなければならない。 ・谷戸小学校の児童数に対応するため谷戸第二小学校が開校されたが、住宅開発等で谷戸第二小学校の児童数が増加し、企業団地の減少で谷戸小学校の児童数は減少をするという結果になった。住宅状況等に大きく影響されるため、将来の児童生徒数を予測するのは大変難しい。
<p>複合化について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を地域コミュニティの場としていかに活用するか。区部に特養や地域の会議室などが併設されている学校があり、そのような考え方重要。 ・学童施設が不足する事態となり、学校敷地内に学童を作った事例がある。学童施設が学校敷地内にあることは保護者への安心感に繋がる一方、学級数が多くなりランチルームやPTA室を教室に転用するという弊害を招いた。学童施設についても計画的に取り扱うことが必要であると考えます。 ・住吉小学校区域は児童センターが近隣にない。近くに遊べる複合化施設等があれば保護者観点からは安心である。 ・武蔵野市は図書館を複合型の施設にし、児童生徒・高校生・高齢者・ボランティアが交流する地域のコミュニティ場所を設けている。このように学校と地域コミュニティの場所を分けているケースもある。